

その他

終始、初年兵教育係助手として

富山県 平野義政

人生にはいろんな「坂」がある、「上り坂」があれば「下り坂」もある。そして「まさか」の坂もある。いま老齢を重ねてきて、ふと自分が歩んできた人生・軍隊生活を振り返ってみる。

私は大正十（一九二一）年十二月二日、富山県下新川郡大布施村植木で父米作、母ちよの長男として生まれた。

私の家は父米作が、約一反歩余りの田をもらい分家した身分でしたから貧乏暮らしの仲間であった。加えて昭和二（一九二七）年に火事で小さな

住宅が全焼した記憶がある。私が数え七歳のころである。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発し、国民はじめすべてのものが戦争のために総動員されるという日本全土は総動員態勢を整えた。当時私は村役場に職をおいていた関係もあり、戦時に対する心得は人一倍持っていたので、率先して大布施青年学校へ入学した。そして戦争に備える軍事訓練を受けた。

それは毎日午後から小学校校庭に集合し、陸軍軍曹の肩章をつけた大坪作次郎教官と陸軍上等兵稲場良作助手（既に故人）両先生の指導のもと毎日猛訓練を受けた。私は青年学校入学以来欠席は少なく、まじめに訓練を受けたので優良生徒とし

て精勤章をもらった。その数、四つの章を肩に縫い付けて一段と熱心に教育を受けた。

昭和十七年、徴兵検査が下新川郡魚津町大町小学校であり、多勢の受験者が集まり、検査開始の順番を待っていた。検査結果は即日発表され、見事甲種合格、喜びいっぱいの気持で家に帰り父母に報告、皆も喜んで祝ってくれた。

昭和十八年一月十日、富山第三十五連隊の跡地の東部第四十部隊へ入隊のため、早朝仏壇にお参りしてから家族の者と別れの挨拶をし、村神社に向った。多勢の村人達の出迎えを受けて神社に参拝し、元気な声で挨拶を行い、国鉄駅へ見送られながら行く。駅に到着して見ると他村からの見送りの人たちも加わり駅前広場を埋めつくしていた。この歓送を受けた私はなお一層元氣百倍、見送りの人たちは各々日の丸の小旗を振りながら武運長久を願い「万歳！ 万歳！」と大声をあげて見送ってくれた。あの感動は今も忘れもしない。

いよいよ東部第四十部隊に到着、間もなく私服

から軍服に着替える。編上靴など大きければ「足を靴に合わせろ」と言われ、その言葉にびっくりした。入隊初めての夕食を終え、班長から訓辞を受け「早く就寝しろ、明日は身体検査があるからそのつもりで休め」と、消灯ラッパを耳にしながら明日からは軍務に精進しなければならないと思う内にいつか眠りについた。

翌朝は起床ラッパ、点呼、朝食をすませて一日の軍隊生活が始まった。班長いわく「お前たちは昨日まで来客だったが、今日から兵隊だ。厳しい軍隊生活に一日でも早く馴れ、一人前の兵隊になるよう努力せよ」といい聞かされた。

入隊三日目の一月十三日、起床ラッパが鳴り、素早く起床、点呼が終わると我々新兵だけが、真冬の積雪一メートルもあつたろうか、気温〇度に近い寒さの中、上半身ハダカになってタオル片手に毎朝の寒中摩擦体操が始まった。

いく日かたったある日、忘れもしない事故が発生した。二月中旬のころだったと思う。同僚の者

が訓練中に三八式歩兵銃の一発の薬きょうを紛失したのだ。これを探すため一列横隊に並んで、薬きょうを雪の中へ足で踏んだものと判断して、雪を掻き分けながら探し続けたが見つつけられなかった。時はもう夕方に入っており、手指は冷え切つて真赤になり感覚はなくなりそんな状態だった。私は初めての苦い経験であり、なんと軍隊とはあんな小さな消耗品一つでも大事にしなければならぬということをつくづく思いしらされた。

こうして毎日軍事訓練を続けてやがて三月中旬、我が原隊である富山歩兵第三十五連隊がいる満州へと移動することとなった。

移動前日、これも初めての面会日が設定された。面会当日兵舎前に面会所が設置され、父母に二カ月半ぶりの面会、家から作ってきた珍しいご馳走を腹いっぱい、故郷の出来ごとなど、互いに話題も多く、語り、聞き合い、満足して別れた。

翌朝、完全軍装して兵舎から富山駅へと行進する。道路の両側には多勢の見送りの人が列をなし

て日の丸の小旗を振って見送ってくれた。その中に私の両親がいたと復員後知らされたが、当日は見当たらなかった。

富山駅に到着して列車に乗り込み、一路原隊を目ざして出発す。釜山港に上陸、鮮満国境を通過して大陸満州国に入る。想像もつかぬ大陸の荒野を列車が走る。やがて目的地の原隊のいる牡丹江省老黒山駅に到着、駅から数十分ぐらい徒步行進して衛兵司令の前を通過したのち各中隊ごとに分散配属された。原隊名は満州東部第一二一部隊、連隊長は平桜大佐で、第一大隊第二中隊に所属することとなった。中隊長は稲場中尉であった。

兵舎は私どもの古兵の五年兵がこの地に移り、兵舎の建造に当たったと後で聞いた。この兵舎は実に小さく低く、丸太材を組み合わせ、屋根と側壁は土で外気を防ぐため分厚く塗り固めてある。本来、この地は冬期間は氷点下三〇度ぐらいになること珍しくないからであるが、兵舎内はペチカで薪を焚いて内部は暖房しているから心地よい。こ

うしてよいよ真の軍隊生活がここから始まるのである。

内地勤務のころは、私も新兵だけの班生活であったが、ここに来て班内には一等兵、上等兵、兵長と古参兵たちが仲間に加わり、毎日緊張の日々が続いた。

そして数日過ぎたころから毎日のように古兵から怒鳴られビンタがある。班長からのビンタも珍しくない。鼻血がでたり頬から首すじに赤黒いアザが出来たこともしばしばあった。

理由は「貴様たちは近ごろタルンでるから軍人精神を叩き上げてやる」と言うことである。こうしてよいよ本格的な軍事訓練が始まった。教育係班長は小杉伍長、教育係助手は塚田上等兵であった。私は先に述べたように入隊前は青年学校に入学し、無事訓練に精力を集中していたので誰にも引けをとらなかつた。いつかの訓練中に「平野模範、前へ出る」と班長に言われ銃剣術の作業とその動作を皆の前で行ったことがあった。

また内勤班における実績なども評価されたのか、敬礼の仕方、発声、機敏な動作なども教官から示すよう命ぜられたことがあった。あるとき連隊の射撃大会があった。私は軽機関銃手としてこの大会に臨み連隊長から大きな表彰状を受けた。この大会の感想を私なりに述べてみる。

軽機関銃は射撃三発で、連続してパンパンパンと撃つ、そしてこのパンパンパンの三連発を十回撃つのである。前方の標的に向って銃口から発射する弾を見ながら着弾を確かめ照準を調整する。私は三十発発射してその十五発が標的に命中していた。とにかく射手は発射するとその弾が標的に当たるか当たらないのかこの目で見えなくてはならない。それがこの目でよく見えたのである。

月日が立って第一期検閲が終わり一等兵に皆進級した。次は上等兵進級で、数カ月後には同年兵中六人が選抜上等兵として進級、私はその中の一人に選ばれ、最高の喜びを胸に秘め決意を新たにした。

召集兵の入隊

しばらくして宇都宮の召集兵（新兵）が配属されて来て、その教育係助手を命ぜられ、訓練に従事した。この召集兵は若い者で二十五歳から三十五歳ぐらいの者でした。中には召集前の職歴が県庁の事務職員、税務署の事務官、青年学校の事務職員、県の農業試験場の技師、もちろんその他に農業者や商店主など様々な職歴の持ち主であった。そして最高齢は三十五歳で故郷には妻子ある者がほとんどであった。

この人達の教育に、年齢に大差がある私が、内勤や軍事訓練に教育係助手として任務を果たすために最善をつくした。しかし老齢兵の集まりで話にならないほど上達が遅く、動作も緩慢で、激しい怒りを抑えることが出来なかつたときもあった。数カ月教育訓練を続けているうちに、この召集兵たちに転属命令が出て隊から去って行った。

現役初年兵入隊

昭和十九年二月、初年兵が入隊して来た。この

初年兵は私たちと同様富山県人で甲種合格者ばかりの若い青年で、生々とした元氣あふれる青年たちである。この初年兵教育にも私が助手として命ぜられ、毎日訓練に訓練を重ね、上達も早く、生きがいのある教育係助手としての日々を送っていた。

そうこうしているとき、ソ満国境警備のため中隊長以下老黒山を後にし、目的地の守備についた。ここは老黒山と比べまた一段と厳しい寒い山地で、兵舎は四方の大きな山林の中にポツンと建っている。夜になると近くでオオカミの鳴声がする所である。さらに奥へ進むと完全な国境で、深い川を境として前方にソ連軍の兵士が行来しているのが双眼鏡で眺められるというところである。

初年兵は専ら軍事訓練を続け、他の兵は交互に警備の任務に就き、数カ月後老黒山原隊へその任務を果して復帰した。そして訓練した初年兵の第一期検閲を、この老黒山の一角の演習場で行うことができた。

南方方面転進命令

昭和十九年半ばころ、我が部隊は南方方面へ転進のため突然非常呼集が入り、完全軍装して速かに集合を命ぜられた。真夜中、老黒山駅から貨車に乗車して一路南下、数日を経て朝鮮釜山港で乗船、船は岸を離れ、四方何一つ見えない海の世界を行くが、幾日かがたつたとき前方に島影が見えて来た。早速甲板へ上り見渡すと、なんだか日本領で建物なども日本風に見えたのでみんな笑顔で浮かべながら喜んだ。

到着したのは桜島港であった。入港して即座に上陸し小学校校舎に入る。長い貨物車と貨物船の旅で、数十日ぶりに日本の清らかな空気を味わうことが出来た。あらかじめ準備してあったドラム缶に湯をわかし、露天入浴ができ生れ変わった気分になった。

ここで二泊して再び乗船、出港、同じく貨物船で一路南下するが目的地はどこか知るよしもない。いく日かかかって到着したのは沖繩の那覇港であ

る。上陸開始、徒步行軍して首里郊外の小さな集落に入る。住民の人たちが作ったサトウキビの加工場から機械器具など全部撤去し、床も土間で平面に仕上げ、私どもが入隊するのを待っていたという。

沖繩県人初年兵入隊

ここへ来て間もないとき、沖繩出身の若い青年たちが初年兵として入隊してきた。みんな元気はつらつとした表情でたのもししい思いがした。ここでもまた教育係助手を命ぜられた。もちろん毎日の軍事訓練は集落の一部のわずかな広場を利用した。

他の兵隊は山林で伐採作業から始まり、山腹からトンネル掘削作業が連日つづいた。こういう作業を経験した者はいないため作業能率はさほど上らなかったようだが、だんだん馴れると次第に上手になり、山という山はトンネルの穴だらけになった。このトンネル掘りは、やがて米軍の反攻が来た時の水際作戦に備えるよう工夫し構築したも

のである。

米軍機襲来

昭和十九年、月日は記憶にないが、突然「空襲警報」が発令された。間もなく遠い澄み切った青空から姿を現したのが米艦載機数十機である。我が軍の高射砲や航空機はいち早く青空へと飛ぶ。米軍の目標は那覇付近の重要軍事施設をあらかじめ確認するためか重爆撃機の襲来はなく艦載機による機銃掃射が続いた。

我が中隊も機銃掃射を受け、トンネルや洞窟等へ住民を避難誘導しながら時を待った。この空中戦により日米双方に被害があった。黒煙を流しながら、また火の玉となって海中に落下する有様は今も脳裏から離れない。

更に南方方面へと進出

昭和十九年十二月、年の暮れである。四、五カ月間訓練など共にした沖繩初年兵と別れを惜しみ、南方方面へ進出のため那覇港に集結、再び貨物船に乗り込んだ。このころの海域は険しい状況下で

あるため船の運航は蛇行型で、さらに危険な状況下にあつては小さな島へ避難したりしながらの航行であつた。

あるとき大きな爆音と同時に、船はあたかも地雷に出会つたごとく振動を起こした。このときみんなが青ざめた顔つきで甲板上へ出たが、私はどうせ死ぬなら船の中でもいい、しかし死ぬなら陸上で勇ましく戦つて死にたいと痛感したものである。

そしてどうにか十二月三十日、入港したのは台湾の基隆港である。即刻上陸、一夜を明けて軍需物資の荷上作業は徹夜で行つた。そのとき指揮官から南方方面の戦況やアツツ島玉砕などが知らされた。そして「お前達は不屈の精神で頑張るように」との言葉があつた。私はこのことを聞き、南方の一部分が全滅しても我が第九師団は絶対に負けるものではないと我が身に言い聞かせた。

昭和十九年十二月三十一日、故郷では大晦日でお寺の鐘の音を聞きながらお寺参りに出掛けるこ

ろである。台湾に上陸して落ち着く間もなく高雄、新竹へと転々と移動、ここでも台湾の初年兵が入隊して来て、初年兵教育助手を命ぜられ、毎日訓練に没頭した。

ある日逃亡兵が出て、台湾の初年兵だと言うことで、深夜、付近の集落などを探し回ったが見つからなかった。また移動することとなり、到着したのは台中郊外の山中である。兵舎は手作りで、なんとか雨をしのげる程度のものであるが、来たころは食糧も底をつき、自給自足のため山の斜面を開拓してさつまいもや落花生などを作ってみた。しかし肥料が無いため収穫も少々という始末。野生のバナナなどは時々食べることが出来た。

兵長昇進

多くの同年兵の中からただ一人兵長に進級した。即刻上官室を巡回して申告をすませた。台湾は年中暑さが厳しいので、体力が衰えたのか、生活環境が一変したためか、多くの友が元気を失っていた。特に南方特有のマラリヤに高熱を出して苦し

んでいる者、長く風呂に入ることが出来ないため皮膚病にかかる者などが続出し、硫黄剤を入れた野外ドラム缶風呂に入って治療の一助とした。

停戦の報告

突然、全員広場へ集合の命令が出た。中隊長から本日をもって全日本国軍は停戦となったと報告された。私どもはやむにやまれない思いをし、ただ両肩を落とし悲痛な思いでならなかった。

やがて内地復員のため基隆港集結、直ちに米兵により武装解除される。そして数日間、米兵の厳重な監視の下に滞在して、ようやく乗船許可が下り、心に喜びを感じながら乗船する。

数日を経て祖国日本の浦賀港に上陸、身体消毒やら諸手続きを終了して復員命令が下り、各人汽車に乗って故郷へと向った。

私は翌日の昭和二十一年一月二十一日の夕方帰宅した。家族へ連絡しなかった突然の帰宅で、皆びっくりしながらも喜んで迎えてくれた。弟は朝鮮の済州島にいたので既に帰っていた。その晩は

話題も豊富で遅くなるまで語り続けた。

今思い起こせば軍隊生活満三年一カ月、この間四組の初年兵教育（宇都宮召集兵・富山軍人現役初年兵・沖繩初年兵・台湾初年兵）に携わることの出来たことを最高の誇りとしている。

今や八十五歳の高齢に達し、余命幾ばくもない身ではあるが、毎日ゲートボールなどに集中、合わせて豊かな人生を送りたいと念じている。

【解説】

筆者が昭和十八年一月に入隊した部隊は富山歩兵第三十五連隊、北陸の雪の季節に初年兵教育を受ける。

一期の検閲前の三月中旬、原隊である富山歩兵第三十五連隊がいる満州へと移動することとなった。原隊の所在地は牡丹江省老黒山、原隊名は満州東部第一二一部隊であった。

一期の検閲を終えて一等兵に進級後、上等兵、選抜上等兵に選ばれ、以来、現役初年兵、召集初

年兵、さらに部隊の移動につれて沖繩、台湾の現地初年兵の教育など、筆者が言うように、終始、初年兵教育係り助手として軍隊生活を送る。

歩兵第三十五連隊の属した第九師団は、太平洋戦争勃発後も満州に駐屯していたが、太平洋各戦域で我が軍の後退が続き、このころから満州部隊の南方、内地への転用が行われるようになった。

昭和十九年六月、米軍は中部太平洋の要衝サイパンに上陸、第九師団は当初、このサイパンへの逆上陸部隊に予定されていたが、これより先にサイパン守備隊が全滅、このため沖繩防衛の第三十五軍に編入され、本島南部において陣地構築を行っていた。

第三十五軍司令部は、歴戦の第九師団に、沖繩防衛の主力部隊として大きな期待を持っていたが、大本営は台湾からフィリピンへ転用された兵力の補充のため、さらに第九師団は台湾への転出が決定し、十二月末に台湾に進駐することとなった。